

松平敬・大井浩明 デュオ・リサイタル

よ誦まれ うた 歐われ かた 語られる ～シェーンベルクな午後～

2007年6月10日(日)午後2時開演 於:けやきホール

松平敬(バリトン)、大井浩明(ピアノ)

後援:日本声楽家協会 制作協力:ナヤ・コレクティブ



プログラム:

アルノルト・シェーンベルク Arnold Schönberg(1874-1951)

作曲年

- | | | |
|-----------|------------------------------------|---|
| 1899 | 貴女の黄金の櫛を私に下さい | Schenk mir deinen goldenen Kamm, Op.2-2 (R. Dehmel) |
| 1903 | 興奮 | Die Aufgeregten, Op.3-2 (G. Keller) |
| 1899/1903 | 警告 | Warnung, Op.3-3 (R. Dehmel) |
| 1903 | 練習を積んだ心 | Geübtes Herz, Op.3-5 (G. Keller) |
| 1903 | 見捨てられた | Verlassen, Op.6-4 (H. Conradi) |
| 1905 | すべて | Alles, Op.6-2 (R. Dehmel) |
| 1905 | 誘惑 | Lockung, Op.6-7 (K. Aram) |
| 1907 | 決死隊 | Der verlorene Haufen, Op.12-2 (V. Klemperer) |
| 1907 | 感謝してはいけない... | Ich darf nicht dankend..., Op.14-1 (S. George) |
| 1908 | この冬の日々に | In diesen Wintertagen, Op.14-2 (G. Henckel) |
| 1908 | 渚にて | Am Strande (R. M. Rilke) |
| 1922-23 | ペトルルカのソネット (『セレナーデ』より) [F.グライスレ編曲] | Sonett Nr. 217 von Petrarca (aus "Serenade, Op.24") [arr. Felix Gleissle] |

..... 休憩

《シュプレヒシュティンメ+ピアノ》

- 1912 月に憑かれたピエロ (全21曲) [E.シュタイン編曲]
Pierrot lunaire, op. 21 [arr. Erwin Stein] (Albert Girauds)

《ピアノ独奏》

- 1926-32 黄金の仔牛の踊り (歌劇『モーゼとアロン』より) [川島素晴編曲・委嘱作品、初演]
Tanz um das goldene Kalb (aus "Moses und Aron") [arr. Motoharu Kawashima]

《語り・歌+ピアノ》

- 1947 ワルシャワの生き残り [K.フレデリック編曲]
A Survivor from Warsaw, Op. 46 [arr. Kurt Frederick]

■ 曲目解説 ■

本日の演奏会の前半で演奏される作品のほとんどは、シェーンベルクが無調様式に到達する前の作品ばかりであり、今回のように作曲順に演奏することにより、この時期における彼の劇的な作風の変遷を詳細に辿ることが出来る。取り上げられたテキストの内容は、一般的なドイツ・リートのもので大きく異なるものではないが、音楽的には、作品を重ねるごとに、ピアノ声部の書法の極度の複雑化、緻密な対位法など、それまでのドイツ・リートに殆ど見られなかった傾向が強くなっている。

「**貴女の黄金の櫛を私に下さい**」ではイエスとマクダラのマリアの禁断の関係が歌われるが、ヴァーグナーの「トリスタンとイゾルデ」を思わせる後期ロマン派特有の半音階的な和声進行がその官能性を一層高め、同時期に作曲された弦楽六重奏のための「**浄められた夜**」の響きも彷彿とさせる。

作品3の歌曲集も、基本的に後期ロマン派風の雰囲気であるが、ピアノ声部におけるモチーフ操作に複雑化の傾向が芽生えてきている。

作品6の歌曲集ではこの傾向はさらに推し進められる。「**見捨てられた**」では冒頭ピアノで演奏されるモチーフが様々に変形されながら歌唱声部、ピアノ声部双方に絶え間なく現れる。「**すべて**」はブラームス的なメランコリーが支配的であるが、半音階的な和声はさらに調性感を希薄にし、歌唱声部とピアノの両手が対等な3声部として緊密な対位法を奏でる。スケルツォ風の「**誘惑**」における調性、テンポの目まぐるしい変化は来たるべき新しい音楽を強く予感させる。

「室内交響曲第1番」(1906)という当時非常に斬新であった作品に続いて作曲された**作品12**の2つのバラードでは、そこでも試みられた4度和声、全音階といった調性の殻を打ち破る響きを取り入れられる。「**決死隊**」では歌詞、音楽ともにマーラー風の軍楽調を彷彿とさせるが、中間部での緻密なモチーフ操作や調性を極限まで拡大した和声構造は彼独自の世界を表出している。

最終楽章で無調様式へと到達する、「弦楽四重奏曲第2番」と同時期に作曲された**作品14**の2つの歌曲では、限りなく無調に近づくことにより、入り組んだ対位法やモチーフ操作はより自由さと複雑さを増し、声楽声部の旋律線もより奔放なものとなっている。当初作品14-3として構想されたものの、生前に出版されなかった遺作「**渚にて**」は無調による最初期の歌曲であるが、波の運動を描写したピアノの音形など、調性の制約から解放されたからこそできる新しい音楽語法の試みが見られる。

プログラム前半最後の「**ペトラルカのソネット**」は、少し時期が飛んで、無調様式を確立したシェーンベルクが更に12音技法を確立しつつある時期に作曲した「セレナーデ」からの楽章である。7つの楽器のための7楽章の作品の中心、第4楽章では男声加わるが、ここで歌われるメロディーのピッチは1オクターヴの全ての半音を網羅した単一の12音列の繰り返しだけで構成されている（詩の各行のシラブル数が11なので、音列との対応がずれてくるというのがミソである）。跳躍音程を多用した旋律線は情熱的な詩の内容にうまく呼応している。

プログラム後半は一旦時代を逆行し、無調時代の代表作「**月に憑かれたピエロ**」で幕を開ける。シュプレヒシュティンメと5人の器楽奏者のために作曲されたこの作品の器楽部分を本日はピアノ・ソロに圧縮して演奏するが、極彩色の音色の要素を敢えて省くことによって、和声やテクスチャそれ自身が持っている「色彩」に、より注意を向けることができるのではないだろうか。

シェーンベルクの編み出したシュプレヒシュティンメは「語り」を音楽化しようとする声楽技法であり、初期バロックにおける音楽改革（e.g. *recitar cantando*）と呼応する面があるのが興味深い。語りの音高を「聴音」するかのように五線譜に書き写し、楽譜には記譜された音高を保持せず自由に上下してよいと指示、しかしリズムは音楽的な拍節に基づいているため、語りと歌を混ぜ合わせたような不思議なニュアンスが立ち現れる。ピエロが月に憑かれて奇怪な妄想を繰り広げるアルペール・ジローの詩（の独訳）は、シェーンベルクによって精巧で幻想的にきらめく音響と幾分キャバレー風な薫りを併せ持つ21のマイクロ・コスモスへと生まれ変わった。

「月に憑かれたピエロ」歌詞大意

[第1部] 1. 月に酔い Mondestrunken

月は目で飲む酒（＝夜の帳）を地平線の上に降り注ぎ、詩人（＝ピエロ）はそれをすすり飲む。

2. コロンビーナ Colombine

月光の青白い花びらをお前のブロンドの髪にそっと咲かせることが出来たら。

3. **伊達男** Der Dandy
ベルガモ生れで伊達男のピエロは、幻想的な月の光で厳かに化粧する。
4. **蒼ざめた洗濯女** Eine blasse Wäscherin
夜、天上で、一人の蒼ざめた洗濯女が、光で織った青白い麻布を洗濯し、暗い草原の上に干す。
5. **ショパンのワルツ** Valse de Chopin
憂鬱なワルツの調べは私の想念にまわりつく。色あせた一滴の血のように。
6. **聖母** Madonna
あらゆる苦悩を負える聖母マリアよ、我が詩の祭壇へ上がり給え！
7. **病める月** Der kranke Mond
死の病に冒された夜の月よ、お前の眼差しは見知らぬ旋律のように私をとらえる。
- [第2部] 8. **夜** Nacht (パッサカリア)
真っ黒な化け物の蛾が太陽の輝きを殺したのだ。天から人々の心の上へ舞い降りる。
9. **ピエロへの祈り** Gebet an Pierrot
ピエロ！私は笑うことを忘れてしまった！
10. **略奪** Raub
赤く高貴なルビーは棺の中にまどろんでいる。ピエロは飲み友達とそれを盗みに行くが...
11. **赤いミサ** Rote Messe
身の毛のよだつ晚餐で、ピエロは血の滴る心臓を恐れおののく魂たちに示す。
12. **絞首台の歌** Galgenlied
首のひよろ長いやせこけた娼婦 (=絞首台)、それが彼の最後の恋人であろう。
13. **斬首** Enthauptung
ピエロは新月刀である月に首を切り落とされる妄想から気を失う。
14. **十字架** Die Kreuze
詩は聖なる十字架だ。詩人はそこで黙して血を流す。
- [第3部] 15. **郷愁** Heimweh
水晶の溜息を聞き、ピエロは悲しげな表情を忘れ、故郷イタリアへ思いを馳せる
16. **悪趣味** Gemeinheit!
ピエロは、わめき散らすカサンドロの禿頭の中に本物のトルコ・タバコを詰め込み一服する。
17. **パロディー** Parodie
老女がぴかぴかの編物針を白髪に刺して、恋い焦がれるピエロを東屋で待っている。
18. **月のしみ** Der Mondfleck
ピエロの黒い上着の背に付いた月の白いしみをこすり続けるが、落ちやしない。
19. **セレナーデ** Serenade
ピエロはチェロを奏でていたが、カサンドロが近づいてくると、彼の禿頭を弓で奏で始める。
20. **帰郷** Heimfahrt (舟歌)
月光を舵として睡蓮の葉を舟として、ピエロは故郷ベルガモへ帰るのだ。日の出も近い。
21. **おお、なつかしい香りよ** O alter Duft
懐かしい香りが私の感覚を魅了し、日の差し込む窓から幸せに満ちた遠方を夢見る。

旧約聖書の出エジプト記を題材とした未完の歌劇「モーゼとアロン」の「黄金の仔牛の踊り」は、不可視の神から戒律を授かるためシナイ山へ40日間籠ってしまったモーゼへ疑いをもった民衆が、黄金で作られた仔牛の像を神として偶像崇拜し乱痴気騒ぎをする様子を、色彩的なオーケストラ曲として作曲されたもので、本日はそれを川島素晴編曲によるピアノ・ソロのためのヴァージョン（本リサイタル委嘱）でお送りする。

「今回の編曲は、シェーンベルクの書いた読めば読むほど完璧で精緻な管弦楽総譜を前に、できる限り原曲に忠実な編曲を心がける以外、成す術はなかった。しかしその結果、演奏不可能に限りなく近い超絶技巧を終始継続する、大変な難曲となった。この場面の狂気をピアノ一台の演奏で表現するには、この方法が最も適切だと思うし、大井氏によるパフォーマンス（あるいはピアノとの格闘）は、ある意味で原曲以上に『黄金の仔牛の踊り』を体現するものとなるであろう。」(川島記)

川島素晴 (かわしま・もとはる) 略歴

1972年東京生れ。東京藝術大学及び大学院修了。92年秋吉台国際作曲賞、96年ダラムシュタット・クラニヒシュタイン音楽賞、97年芥川作曲賞等。今年度日本音楽コンクール作曲部門審査員。94年から「演じる音楽」を提唱して作曲活動を続ける一方、編曲家としての活動も多く、シュトゥツマン&尾高忠明/紀尾井シンフォニエッタ(『しばらくは音楽で』)、飯森範親/いずみシンフォニエッタ大阪(『大フーガ』)、宮本文昭オーボエアンサンブル(『クーブランの墓』他)、ストリング・アンサンブル・ヴェガ(『ボレロ』他)、ラ・クワルティーナ(『モーツァルトメドレー』他)等、日本を代表する一流演奏家のために多数編曲している。▲ウェブサイト <http://www.komp.jp/kawashima.html>

ユダヤ系のルーツを持つシェーンベルクは、1933年ナチスの迫害から逃れるためアメリカへ亡命する。「**ワルシャワの生き残り**」ではナチスによる強制収容所でのユダヤ人虐殺の様子が語り手(収容所からの生き残り)とオーケストラによって生々しく告発される。語り手のパートは一線譜で記譜され相対的な音程のみが示され(但し臨時記号も使用してそれなりに細かく音高が指定されている)、シュプレヒシュティンメの記譜法が単純化されたものといえる。

7分あまりの演奏時間に凝縮されたこの作品の最後では、「1, 2, 3, 4…」とガス室で処刑するユダヤ人を点呼する中、突如そのユダヤ人達が彼らの信仰告白ともいえる申命記の一節「聞け、イスラエルよ **שמע ישראל**」を歌い始める様子がユニゾンの男声合唱で演奏される。

地のテキストは英語、ドイツ兵の台詞はドイツ語、ユダヤ人の合唱はヘブライ語と多言語の響きが用いられているのも特徴である。

本日は、この作品の初演をした指揮者K.フレデリックの編曲によるピアノ版で、男声合唱のパートを語り手が引き続き担当する形での演奏になる。 [文責：松平敬]

■出演者プロフィール■

松平 敬 (まつだいら・たかし) バリトン

愛媛県宇和島市生。東京藝術大学音楽学部卒業。同大学大学院音楽研究科修士課程修了。大学院においてシェーンベルクの歌曲について研究をする。在学中より作曲、即興演奏などにも興味を持ち、声楽家としてのトレーニングに加え、スコア・リーディング、対位法など幅広い音楽研鑽を積む。コンサート・ソリストとして、ヘンデル「メサイア」、バッハ「マタイ受難曲」などを歌う。シューベルト「冬の旅」など、歌曲作品のレパートリーも幅広い。また、前衛音楽の演奏にも積極的に取り組み、様々なポピュラー・ソングのオリジナル編曲や自作の演奏にも力を入れている。2000年以降ほぼ毎年、ドイツのキュルテンに於けるシュトックハウゼン講習会へ参加している。同講習会に於けるコンサートにも出演し、その演奏は作曲家自身より「極めて独創的な演奏解釈」などとの評価を受けた。2004年東京においてベリオ、クセナキスなど全曲前衛作品ばかりによるリサイタルを開催し「音楽の友」誌上などで高く評価される。湯浅譲二氏の推薦を得て「秋吉台の夏2005」の声楽講師を務める。2007年2月にはケルンにおいて志田笙子、シェルシなどの作品を演奏し、そのコンサートはドイツ国内で放送される。現在、聖徳大学、文教大学講師、日本声楽アカデミー会員、双子座三重奏団メンバー。

▲ウェブサイト：<http://tierkreis.web.infoseek.co.jp/>

大井浩明 (おおい・ひろあき) ピアノ

京都市生まれ。スイス連邦政府給費留学生ならびに文化庁派遣芸術家在外研修員としてベルン芸術大学(スイス)に留学、同大学院ピアノ科ならびに古楽部門チェンバロ科修了。ピアノをブルーノ・カニーノ、チェンバロと通奏低音をディルク・ベルナーに師事。第30回ガウデアムス国際現代音楽演奏コンクール(1996)、第1回メシアン国際ピアノコンクール(2000)入賞。第3回朝日現代音楽賞(1993)、第11回アリオ賞奨励賞(1994)、第4回青山音楽賞(1995)、第9回村松賞(1996)、第11回出光音楽賞(2001)、第61回文化庁芸術祭新人賞(2006)等を受賞。これまでにN響、新日フィル、都響、シティ・フィル、仙台フィル、京都市響等のほか、ヨーロッパではバイエルン放送響、アンサンブル・アンテルコンタンポラン等と共演。仏TIMPANIレーベルよりCD《シナファイ》《エリフソン》をリリース、ル・モンド・ドゥ・ラ・ミュージック誌"CHOC"グランプリ等を受賞。近年はチェンバロ、クラヴィコード、オルガン等の歴史的鍵盤楽器による古楽演奏にも力を入れ、特に今シーズンはフォルテピアノでのモーツァルト・クラヴィアソナタ全曲シリーズ、寺神戸亮指揮レ・ボレアード(古楽器オーケストラ)との協奏曲(KV453)、オリジナル楽器でのグラスハーモニカ作品(KV356/KV617)の紹介などを行っている。▲ウェブサイト：<http://ooipiano.exblog.jp/>